

取した。さらに化学療法開始前、末梢白血球数が最低となった時点及びその後末梢白血球数が最も高値を呈した時点での関連を検討した。その結果、観察期間中に41.9%の被験者に口腔粘膜炎が発生した。口腔粘膜炎が発生した者では、しなかった者に比べてベースラインの50%以上に回復するまでの日数(50%回復日数)が有意に多かった。これらより、唾液中白血球量の測定は化学療法中の患者における晩期の口腔粘膜炎発症予測に有用であることが示された。

その後の研究では、口腔粘膜炎発症の微生物学的要因と考えられる口腔カンジダの抗がん剤投与前後の量的測定が口腔粘膜炎の発症予測に有用かを検討した。化学療法開始前に歯科へ周術期口腔管理を依頼された125名を対象とし、抗がん剤投与前と投与後の口腔粘膜の状態と口腔カンジダ量を測定した。カンジダ量は抗がん剤投与後に有意に増加し、抗がん剤投与前の段階と口腔粘膜スコアで有意な関連が認められたが、抗がん剤投与後と口腔粘膜スコアはさらに有意に強い関連を認めた。論文で報告した唾液白血球の回復は、化学療法後半で重度口腔粘膜炎の発症を予測したが、カンジダ量は比較的早期の粘膜炎発症を予測しうることが示唆された。

## 2. 下顎骨病的骨折を呈する10例の患者の臨床報告

Clinical study of pathological mandibular fractures in our department

○小松 祐子, 川井 忠, 大橋 祐生,  
古城 慎太郎, 山谷 元気, 角田 直子,  
宮本 郁也, 山田 浩之

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座  
口腔外科学分野

**【目的】** 下顎骨病的骨折を有する患者の臨床情報を把握することを目的にした。

**【対象および方法】** 本研究は症例集積研究である。2015年1月から2019年12月までの5年間に当科を受診し、下顎骨骨折と診断された症例を診療録と画像検査所見から抽出した。これ

らの症例のうち、病的骨折と臨床的に診断されたのを対象とした。さらに、病的骨折の症例について、初診時の原疾患、発症時期、骨折時の年齢、性別、骨折部位、発症誘因、治療法および治療成績を調査した。

**【結果】** 5年間で下顎骨病的骨折と診断された症例は10例であった。原疾患は悪性腫瘍が5例、放射線性骨髄炎および顎骨壊死が2例、嚢胞が2例、良性腫瘍が1例であった。悪性腫瘍の5例は初診時から病的骨折を認めていたのが1例、外科療法中と外科療法後に病的骨折を認めたのが各々2例であった。放射線性骨髄炎の2例は40 Gy以上の放射線照射が行われていた。嚢胞の2例は埋伏智歯を伴う含菌性嚢胞であり、外科療法中に骨折を認めた。良性腫瘍の症例は初回手術後の顎骨欠損が大きく、二期再建の待機中であった。上記10例のうち外科療法が選択されたのは2例、保存療法が選択されたのは5例であり、他3例は病的骨折に対する治療が不要であった。治療対象の7例において、治療方法によらず発症後1年以内に「軽快」と評価されたのは4例、「不変」と評価されたものが2例、転院となったため「評価困難」であったものが1例であった。

**【考察】** 本研究は少数例の症例集積研究ではあるが、咬合偏位を認めた症例において保存療法が奏功しなかった。したがって、今後同様な症例に対しては外科療法の選択に関して慎重に検討する必要があると考えられた。

## 3. 岩手医科大学附属歯科医療センター義歯外来における3ユニットブリッジの予後に関する10年間の後ろ向きコホート研究

10-year retrospective study of 3-unit fixed dental prosthesis in denture outpatient department, Iwate Medical University Dental Center

○齊藤 裕美子

岩手医科大学歯学部補綴・インプラント学講座 補綴・インプラント学分野

**目的:** 岩手医科大学附属歯科医療センター義歯外来における過去の3ユニットブリッジを対象

として、ブリッジ治療における累積成功率、累積生存率を同一の欠損歯数で比較調査し、補綴治療を行う上での長期予後獲得の要因を調査した。

**調査項目と方法：**対象は患者情報取得可能な2011年4月1日から2014年12月31日までの間に現在の岩手医科大学附属歯科医療センター義歯外来を受診し3ユニットブリッジ治療を受けた患者332名。2021年12月31日を追跡最終日として、補綴装置の種類、ブリッジ欠損部（上顎、下顎、欠損部）、累積成功率と累積生存率、併発症の内訳について調査した。

**結果：**ブリッジ全体の累積成功率は88.1%、累積生存率は92.3%であった。接着ブリッジの累積成功率は71.4%、累積生存率は78.6%で従来型ブリッジや延長ブリッジと比較して低かった。併発症のうち歯根破折の支台歯はすべて失活歯でメタルコアの割合が4症例中3症例を占めていた。

**考察：**得られた結果より支台歯にメタルコアを使用すると歯根破折を誘発する可能性が高まること示された。ポストを用いる場合はメタルフリー治療を選択した方が歯根破折のリスクは低くなる可能性があると推察された。

**結論：**1) ブリッジ全体の累積成功率は88.1%、累積生存率においては92.3%であった。

2) 調査した337個のブリッジのうち接着ブリッジは14個で、累積成功率は71.4%、累積生存率は78.6%と最も低かった。

3) 併発症の内訳としては脱離が最も多くを占めていた。

4) 歯根破折を伴う支台歯はすべて失活歯であり4本中3本がメタルコアを占めていた。

## 一般演題

### 1. 2症例の von Willebrand 病患者に対する抜歯の周術期管理経験

Perioperative management of tooth extraction in two patients with von Willebrand's disease.

○柴田 滉太郎, 平野 大輔, 星 勲,  
川又 慎介, 小松 祐子, 山谷 元気,  
川井 忠, 千葉 俊美\*, 山田 浩之

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座  
口腔外科学分野, 岩手医科大学歯学部  
口腔医学講座 関連医学分野\*

## 【緒言】

今回我々は、入院下でⅡ型、Ⅲ型の von Willebrand's disease (以下 vWD) 患者の抜歯を経験したので周術期管理の概要を報告する。

## 【症例】

症例1：患者は30歳女性。過去の抜歯時に止血困難を認めたため、血液凝固異常を疑い、当科で血液検査を施行し、von Willebrand 因子活性の低値を認めた。血液腫瘍内科へ対診し、Ⅱ型 vWD の診断を得た。異常出血時の静脈路確保困難を想定し中心静脈カテーテルを留置後、ヒト血漿由来 von Willebrand 因子含有血液凝固第Ⅷ因子製剤を抜歯前日から投与し、局所麻酔下で計5本の普通抜歯を行い、良好な止血を得た。

症例2：患者は74歳男性。既往歴に副鼻腔手術後の止血困難と第Ⅷ因子欠乏を認めた。出血性素因の精査を目的に当院血液腫瘍内科へ対診し、Ⅲ型 vWD の診断を得た。遺伝子組換えヒト von Willebrand 因子製剤及び血液凝固第Ⅷ因子製剤を投与後、局所麻酔下で $\overline{6}$ を抜歯した。術中の出血は微量であり、術後も良好に経過した。

## 【考察】

血液腫瘍内科と連携し、入院下でⅡ型、Ⅲ型の vWD 患者に対する抜歯の周術期管理を経験した。Ⅲ型 vWD は稀な疾患であり、遺伝子組換えヒト von Willebrand 因子製剤を投与し抜歯した報告例は本邦では初めての報告である。